

国境の島

九州の西海岸に浮かぶ壱岐、対馬、五島列島は歴史上ずっと、日本とアジア大陸との出会いと交流の最前線にあった。古墳や寺院、古代集落や城跡、そして現在も行われている風習や儀式など、これらの島々は 2300 年にわたる交易、文化交流、そして紛争の歴史を物語っている。

壱岐と対馬が位置する対馬海峡を挟んだ日本列島の人々とアジア大陸の人々との定期的な交流は、紀元前に確立していたと考えられている。そのような交流があったことを示す最古の記録は、中国の 3 世紀の歴史書『三国志』の一部である『魏志倭人伝』に見られる。

『魏志倭人伝』には、朝鮮半島を経由して邪馬台国へ向かう魏の使者について、対馬や壱岐国の王都・原の辻の様子が記されている。壱岐の人々が朝鮮半島、中国、日本本土からの商人や旅人と品物や情報を交換したこの交流の中心地の歴史は、**原の辻特別史跡**と隣接する**一支国博物館**で知ることができる。対馬の初期の歴史は、詳細な展示を誇る**対馬博物館**に展示されている。

壱岐王国は日本本土の勢力に吸収されたと考えられており、6 世紀から 7 世紀にかけて、朝鮮半島での戦いの中継地としてこの島を利用した。その際、有力な武将の墓として数百基の**古墳**が築かれたと考えられている。古墳の多くは現在も残っており、一部は一般に公開されている。

600 年代半ばに日本とその同盟国が唐と新羅によって半島での野心を打ち碎かれた後、対馬と壱岐は大陸からの侵略を防ぐために設けられた城と烽火台のネットワークの重要な拠点となった。対馬の**金田城**はこのネットワークの最初の防衛線であり、壱岐の**岳ノ辻**は外国の脅威を九州に知らせるための烽火の場所であったと考えられている。

7 世紀は政治的緊張の一方で、平和的な交流も盛んに行われた時代であった。630 年以降、日本は唐に**外交・通商使節**を派遣し、中国の文化や文明に学ぼうとした。当初は壱岐・対馬を経由していたが、702 年からは五島から直接東シナ海を横断する、短い危険なルートが採用された。五島列島には風光明媚な**三井楽半島**をはじめ、**遣唐使ゆかりの地**が数多く点在しており、その船の多くがこの地から出発している。

中世から戦国時代にかけて、対馬海峡を挟んだ交流はさまざまな形で行われた。国境の島々の商人や海賊は、朝鮮半島や中国の沿岸で交易や海賊行為を行い、中には大きな利益を得て、一定の政治的な独立を果たす者もいた。壱岐の**生池城**はその一人によって築かれ、五島列島の**日島の石塔群**は歴史に名を残すことのない船乗りたちの記念碑から構成される。

1590 年代、武将の豊臣秀吉（1537-1598）は壱岐、対馬、朝鮮半島を経て中国を征服しよ

うと二度試みた。壱岐の**勝本城**と対馬の**清水山城**はその足がかりとして築かれたが、結局は失敗に終わり、朝鮮半島との関係は一時的に断絶した。

1600 年代初頭、対馬の領主である宗家の努力によって、再び関係が修復された。江戸時代（1603-1867）、宗家は朝鮮との貿易を独占し、朝鮮と徳川幕府の外交関係を管理する見返りに、有利な特権を与えた。**朝鮮通信使**はすべて対馬を通過し、**万松院の宗家墓所**や**お船江**のドックなど、対馬には朝鮮貿易の繁栄の象徴となる遺跡が残されている。

このように、壱岐・対馬・五島は、アジア大陸との交流の歴史を物語る多くの遺跡や風習、遺物があり、「国境の島 壱岐・対馬・五島～古代からの架け橋～」として日本遺産に登録されている。